

ある遊園地のお化け屋敷で――

僕の町には大きな遊園地がある。

お父さんが小さいころ、よく親に連れて行ってもらった思い出の場所らしい。

でも、もうすぐ潰れそうなんだって、寂しそうに言ってた。

しかたがないよ。

あそこには最新の絶叫マシンもないし、看板も色が剥げて、なんだかか園全体の外観も古いんだ。

お客さんもほとんど入っていないって聞くしね。

僕は潰れるまえに、一度行ってみるつもりだ。

入ってみたいところがあるんだ。

それは、お化け屋敷だ。

この遊園地のお化け屋敷は、昔から「本物がある」って噂があるんだって。

もしそれが本当なら、僕は見てみたい。

本物の幽霊を。

だって、僕は一度も本物なんて見たことがないからさ。

でも、さすがに一人で行くつもりはない。

僕一人が「本物を見た！」っていつても、だれも信じてくれないだろうし。

あと、ちよつとだけ……こわいんだ。

だから、興味を持つてくれそうな友達数人に声をかけてみることにした。

遊園地の最終日。

お化け屋敷のまえに、ぼくたちは集まった。

「よし、みんな揃ったな」

「緊張するなあ」

「うん、少しだけこわいかも」

「よし、いくぞ！」

「みんな気合い入れよ！」

その日、町は大騒おおさわぎになった。

町の人みんな、口々にこういった。

『あの遊園地にはやっぱり本物がいた！』と。